

名もなき母たち

鸚鵡おかしでさえお母さんと呼べるのだから、わが子にせめて「お母さん」とだけでもいえるようにしようと、知恵遅れの子と長年苦闘したある母の話が忘れられない。ついに母の願いはかなえられないが、それでも、「この子のお蔭で私は人生を十倍も生きた感じがする」と、振り返って感謝していた。

お母さんといわそうとする懸命の努力も、しよせんは自分のことを考えてのこと。賢明にも母はそれに気づいて、ものいわぬ子の方へ母が擦すり寄っていった。自分の方に引き寄せようとする心を一擲まして。だからこそ、己が人生を十倍も深く重く生きえたのであろう。

私の嫁が彼女の友人の母について語ったことも忘れられない。

友人は夫との愛のもつれに絶望して実家に帰っていった。娘の異常な姿に母はおろおろするばかりだが、警戒は怠らなかつた。ある日隙間から隣室をうかがうと、娘は死に支度をしているではないか。いすに上がり、かもいにつるした帯に首をいれよう

としている。

ふすまをけつて踏み込もうとするわが心を、母はとっさに抑えた。「してからでも遅くはない」。ああ、すさまじい母の愛のひらめき。

娘も決行しなかった。いまわの際に、彼女は再生の決断を自分に下したのである。かりに母が止めていたとしたら、悲劇はただ次の機会に延ばされるだけである。「そのおばさん普通の人のよ」と、嫁はわざわざつけ加える。私が感嘆あまりにも久しかったから。

母、私は七歳の時、母を失った。母は埋葬だった。雨の日は「お母さんがぬれている」と泣きじゃくつたらしい。叔母の話である。私は生まれた時に養子に決まっていたが、母は「この子は変わっているから手放せない」といつていたらしい。それも叔母の話。

(一九八一年五月二十七日)